

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月19日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21760501

研究課題名（和文） 日本山岳建築史の構築に向けた日本アルプスの山小屋建築に関する調査研究

研究課題名（英文） Research of the Mountain huts in the Japan Alps
in Order to Document the History of Japanese Mountain Architecture

研究代表者

梅干野 成央 (HOYANO SHIGEO)

信州大学工学部・助教

研究者番号：70377646

研究成果の概要（和文）：

本研究では、近代登山発祥の地として知られる日本アルプス（北アルプス・中央アルプス・南アルプス）の山小屋について調査研究を行い、近代登山を契機とした山岳建築の歴史的文脈を把握した。とりわけ、近代登山の中心地である北アルプスの上高地地域、槍地域、穂高地域の山小屋について重点的に調査研究を進め、近代登山の普及にともなってそれまで山岳にて育まれてきた土地と建物に関する建築文化が登山者へとひらかれていく、という山小屋の建設過程を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This study traces some links of the development process of mountain huts in the Japan through the example of the mountain huts. By the analysis of the mountain huts and the land on which they were built, the mountain huts were built by using the sites and the huts of the occupants (i.e. woodsmen and huntsmen, etc.) and by taking advantage of their knowledge and expertise of both the sites and huts.

交付決定額：

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠

キーワード：山岳建築、山小屋、近代登山、日本アルプス

1. 研究開始当初の背景

山岳は、信仰の場として、古くから人の暮らしと関わってきた。山岳のなかには、神を祀る社や仏を安置する堂がたてられたとともに、こうした社や堂の巡礼者が体を休める建物もたてられた。その代表例として、立山の室堂（国指定重要文化財）をあげることができる。また、山岳は、生業の場としても、古くから人の暮らしと関わってきた。山岳のなかには、食材、建材などの資源が豊富にあり、

こうした資源を得て生活していた猟師や木樵などの小屋が無数にたてられた。

近代になると、山登りを純粋に楽しむ近代登山が普及し、山岳は広くひらかれた。その大きなきっかけとなったのは、志賀重昂が明治27年（1894）に『日本風景論』のなかで発表した「登山の気風を興作すべし」であるといわれている。その後、明治38年（1905）に山岳会（現・日本山岳会）が発足するなど、近代登山は大衆化し、山岳のなかには、登山

者の休憩、避難、宿泊に供せられる施設である、山小屋が続々とたてられた。

山岳には、厳しい自然がある一方、人は、山岳のなかに建物をたてつづけてきた。そこには、厳しい自然のなかで人が生きていくための空間を得てきた、山岳の建物の歴史が脈々と息づいていることがわかる。では、人は、この山岳という環境のなかで、どのような建築の文化を育んできたのか。

この、山岳という環境のなかで育まれてきた建築の文化、すなわち、山岳建築は、これまで、柳田國男や今和次郎らの民俗調査や、吉阪隆正の山小屋に関する研究などによって、個々に記録されてきた。近年では、平瀬有人らが山小屋に関する研究を進めているものの、その内容は、現状からの考察にとどまっている。つまり、これまで、山岳建築は、断片的に渉猟されてきたといえ、その歴史的文脈は、体系的に把握されてこなかったといえる。

2. 研究の目的

本研究では、近代登山発祥の地として知られる日本アルプス（北アルプス・中央アルプス・南アルプス）の山小屋について調査研究を行い、近代登山を契機とした山岳建築の歴史的な文脈を把握する。

本研究の成果は、建築史の分野において、山小屋という研究対象を開拓し、日本山岳建築史という新たな研究領域の構築へと向かう。山小屋は、近代登山の歴史を物語る貴重な証言者であり、そのなかには、築後 50 年以上が経過し、近代化遺産としての価値を有するものもある。近代登山を契機とした山岳建築の歴史的な文脈を明示する本研究は、これからの山岳建築の方向性を示す重要な指針となる。また、山小屋は、人工物であると同時に、それ自体が自然とあいまって、山岳の景観を構成している。本研究では、自然と建築の歴史的な関係も紐解かれるだろう。景観の保全が唱えられている今日、本研究は、山岳の景観美を未来へと受け継ぎ伝えていくための重要な観点をも提供する。

3. 研究の方法

本研究では、上記の目的を達成するため、

(1) 日本アルプスの山小屋に関する建物調査、(2) 山小屋を中心とした山岳建築の史的な研究、の 2 点に取り組む。

(1) については、近代登山発祥の地として知られる、日本アルプスを対象として進めた。日本アルプスは北アルプスと中央アルプスと南アルプスからなり、その登山道の下端から上端には、202 棟もの山小屋がたっている。そのため、建物調査では、築後 50 年が経過しているものについて詳細調査（配置図・平面図・立面図・断面図・痕跡図・変遷



写真1 槍ヶ岳山荘



写真2 燕山荘

図を作成)を行い、築後 50 年に満たないものについて簡易調査（配置図・間取り図・簡易的な断面図を作成)を行う。とりわけ、近代登山の中心地である北アルプスの上高地地域、槍地域、穂高地域の山小屋について重点的に進めることとし、その他の山小屋については、歴史的に重要なものを優先して進めることとした。調査後には、個々の山小屋ごとに、建物の原形と変容の過程、および、その形態を把握し、まとめる。

(2) については、(1) で得られた成果を基盤とする。文献等で確認することのできる山岳を生活の場としていた人々の小屋と山小屋との関係を考察し、山岳に育まれてきた建築文化の歴史的な文脈を明示する。

4. 研究成果

(1) 日本アルプスの山小屋に関する建物調査

以下の山小屋について、詳細調査を行い、配置図・平面図・立面図・断面図・痕跡図・復原図・変遷図を作成し、まとめた。

○北アルプス：〈上高地地域〉岩魚留小屋・徳本峠小屋・嘉門次小屋・焼岳小屋〈穂高地域〉洞沢ヒュッテ・洞沢小屋・フカスの岩小屋・穂高岳山荘・北穂高小屋〈槍地域〉南岳小屋・槍ヶ岳山荘(写真1)・ヒュッテ大槍・ヒュッテ西岳・大天荘・燕山荘(写真2)〈そ

の他の地域) 餓鬼岳小屋・岩菅山避難小屋
 ○中央アルプス：頂上木曾小屋・西駒山荘
 ○南アルプス：北沢駒仙小屋

(2) 山小屋を中心とした山岳建築の史的・研究
 近代登山の礎を築いた人物の一人に、イギリス人宣教師のウォルター・ウェストン(1861-1940)がいる。ウェストンは、日本の山岳を歩き、その素晴らしさを世界へと紹介した「日本近代登山の父」と称される人物である。ウェストンの山行の対象は、主に日本アルプスであった。なかでも、北アルプスの槍ヶ岳への山行は多く、明治24年(1891)、明治25年(1892)、大正元年(1912)、大正2年(1913)の4回を数える。明治38年(1905)に小島鳥水(1873-1948)らがウェストンの勧めを受けて山岳会(現在の日本山岳会)を発足させるなど、この頃から近代登山が広まったことをふまれば、ウェストンの槍ヶ岳山行は、近代登山の普及前後を含む、山小屋の建設過程を知るうえでの重要な題材であるといえる。そこで、ウェストンの槍ヶ岳山行を主な題材に、その山行経路付近に開設された山小屋を事例として、山小屋と近代登山の普及以前から山岳にたてられていた小屋との関係を土地と建物に即し、山小屋の建設過程を把握した。

①山小屋の土地

まず、ウェストンの槍ヶ岳山行経路付近に開設された山小屋を事例として、山小屋と近代登山の普及以前から山岳にたてられていた小屋との関係を土地に即して把握した。

ウェストンの槍ヶ岳山行における休泊場の位置とウェストンの槍ヶ岳山行経路付近に開設された山小屋の位置を重ね合わせた結果、上高地温泉ホテル・上高地清水屋ホテル、岩魚留小屋、嘉門次小屋、槍ヶ岳殺生ヒュッテの位置で重なっていた。したがって、これらは、ウェストンの槍ヶ岳山行における休泊場と同じ、あるいは、それにちなんだ山小屋であるといえる。

その他の山小屋は、多くの場合、これらの事例とは対照的に、新たな土地にて開設された。土地の開拓にあたって、近代登山の普及以前から山岳を生業の場としていた人々の土地勘を多分に参酌して条件のよい土地を求めた過程を想定することができる。実際、大正6年(1917)に開設された槍沢小屋(現・槍沢ロッジ)の土地の開拓にあたって、嘉門次の助言を仰いだことが記録されている。

山岳は、その険しい自然環境から、建物をたてることのできる土地が限定される。雪崩などの災害にあう危険性も高く、水を得られる場所も限られている。また、急勾配の傾斜地が大部分を占めているうえに、道(登山道)も限られている。したがって、あらかじめ条件に恵まれていた近代登山の普及以前から山岳にたてられていた小屋の土地に山小屋



写真3 徳本峠小屋

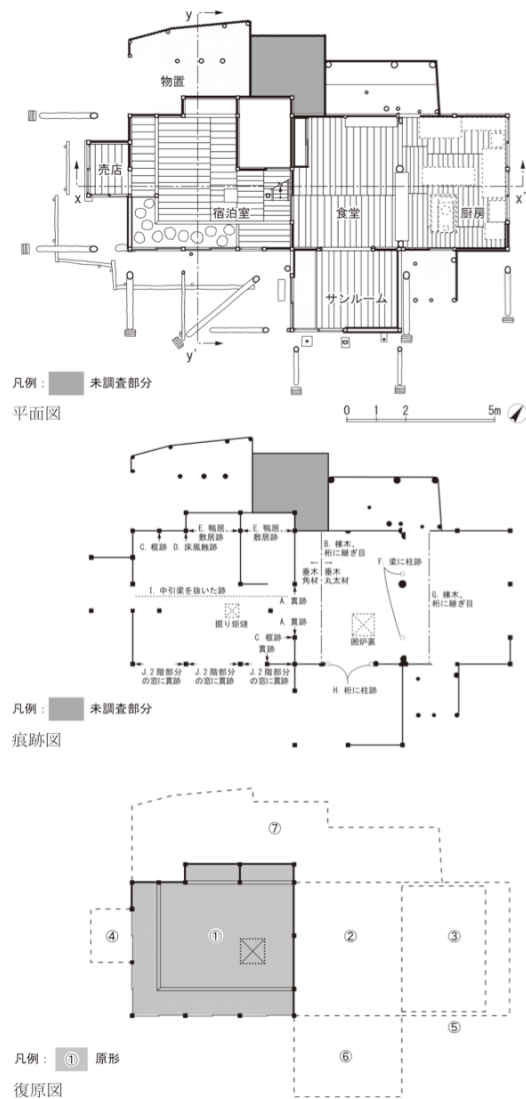


図1 徳本峠小屋の復原

が開設されたことや、また、近代登山の普及以前から山岳を生業の場としていた人々の土地勘が多分に参酌されて条件のよい土地が開拓されたことは、きわめて合理的な過程であったといえる。

②山小屋の建物

つぎに、ウェストンの槍ヶ岳山行経路付近に開設された山小屋を事例として、山小屋と近代登山の普及以前から山岳にたてられていた小屋との関係を建物に即して把握した。

岩魚留小屋は農商務省の岩魚留官舎が、嘉門次小屋は猟師小屋が、徳沢園は牛番小屋が転用され、開設された。岩魚留小屋と嘉門次小屋と徳沢園の開設にあたって転用されたこれらの建物は、どれも、近代登山の普及以前から山岳にたてられていた小屋である。これらの事例は、一部の山小屋が、近代登山の普及以前から山岳にたてられていた小屋の建物を引き継いで開設されたことを示している。これらのうち、当初の建物がこの最も開設年の古い山小屋は、岩魚留小屋である。建物調査をふまえ、岩魚留小屋の原形を復原したところ、その姿は、室内に炉が配された一間の建物であった。この姿の建物は、近代登山の普及以前から山岳にたてられていた小屋に広くみられる。嘉門次の猟師小屋も岩魚留小屋の原形と同様な姿である。また、民俗調査の成果にも同様な姿の樵夫小屋が記録されており、さらには、山岳信仰の代表的な建築遺構である立山の室堂の原形にも同様な姿が想定されている。

一方、その他の山小屋は、多くの場合、これらの事例とは対照的に、新たな建物にて開設された。このうち、当初の建物がこの最も開設年の古い山小屋は、徳本峠小屋である（写真3）。徳本峠小屋は、大正12年(1923)、上高地温泉株式会社によって、島々から明神に至る登山道の最高地点に開設された。建物調査をふまえ、徳本峠小屋の原形を復原したところ、その姿もまた、岩魚留小屋と同様に、室内に炉が配された一間の建物であった（図1）。したがって、山小屋と近代登山の普及以前から山岳にたてられていた小屋は、室内に炉が配された一間の建物という建築の形態において関連づけることができると同時に、この姿の建物を山小屋の一つの支配的な源流として位置づけることができる。

また、岩魚留小屋と徳本峠小屋は、原形から現在の姿に至るまでの変容過程も共通している。岩魚留小屋と徳本峠小屋の原形である、室内に炉が配された一間の建物は、山岳という険しい自然環境のなかで、人が食事をとり、体を休めることのできる、多機能な最小限の空間であったといえる。これに対し、岩魚留小屋と徳本峠小屋の現在の姿は、後に、寝室や厨房や食堂など、個別的な機能を有した空間が段階的に増築された結果、機能的に分節した複数の空間によって構成されている。つまり、岩魚留小屋と徳本峠小屋の変容過程は、多機能な最小限の空間が機能的に分節化された複数の空間へと至る、山小屋の変容過程に関する一つの傾向を示している。

③山小屋の土地と建物に関する類型及びその通時的傾向

以上をふまえ、ウェストンの槍ヶ岳山行経路付近に開設された山小屋の土地と建物を、近代登山の普及以前から山岳にたてられていた小屋との関係にもとづいて分類すると、以下ようになる。

《土地》

I. 近代登山の普及以前から山岳にたてられていた小屋の土地（跡地・隣地）

II. 新たな土地（開拓地）

《建物》

i. 近代登山の普及以前から山岳にたてられていた小屋の建物（転用建物）

ii. 新たな建物（新築建物）

これらの分類は組み合わせの関係にあるため、山小屋の開設は、I-i、I-ii、II-i、II-ii、という土地と建物に即した4通りの類型にて理解することができる。先に把握した山小屋の土地と建物をふまえ、個々の山小屋の類型をまとめた（表1）。

ウェストンの槍ヶ岳山行経路付近には、明治期の後期に2軒、大正期に9軒、昭和期については戦前に7軒、戦後に4軒、計22軒の山小屋が開設された。これらの軒数をみると、明治期の後期から戦前までの短期間に、計18軒という大多数の山小屋が開設されたことがわかる。これは、明治38年(1905)の山岳会発足などを契機とした近代登山の普及の実態をよく示しており、また、戦前までに現在の山小屋の基盤が形づくられていたことを示している。戦前に開設された計18軒の山小屋をそれぞれの類型に即してまとめると、I-iが3軒、I-iiが5軒、II-iが該当なし、II-iiが10軒であった。さらに、戦前に開設された山小屋のうち、それぞれの地域で最初に開設された、地域の先駆的な山小屋の類型をみると、島々から明神に至る登

表1 山小屋の土地と建物に関する類型

地域	山小屋【開設年】名称（標高）	土地の分類	建物の分類
島山道 島々・明神	【M44】岩魚留小屋 (h=1260)	I (樵夫小屋)	i (農商務省の小屋)
	【T12】徳本峠小屋 (h=2135)	II	ii
明神	【T13】吉城屋（現存せず）	I (牛番小屋)	ii
	【T14】嘉門次小屋 (h=1550)	I (樵夫小屋・猟師小屋)	i (猟師小屋)
	【S08】明神館 (h=1530)	I (牛番小屋)	ii
	【S27】山のひだや (h=1540)	II	ii
徳沢	【S09】徳沢園 (h=1560)	I (樵夫小屋・牛番小屋)	i (牛番小屋)
	【S31】徳沢ロッヂ (h=1550)	II	ii
横尾	【S21】横尾山荘 (h=1615)	II	ii
登山道 横尾 - 槍ヶ岳山頂	【T06】横沢ロッヂ (h=1820)	II	ii
	【T10】ヒュッテ大権 (h=2850)	II	ii
	【T11】槍ヶ岳殺生ヒュッテ (h=2850)	I (猟師小屋)	ii
	【T14】ノボ小屋（現存せず）	II	ii
	【T15】槍ヶ岳山荘 (h=3080)	II	ii
上高地	【M37】上高地温泉ホテル (h=1500)	I (温泉宿)	ii
	【T12】上高地清水屋ホテル (h=1500)	I (温泉宿)	ii
	【T01】五千尺ホテル (h=1500)	II	ii
	【S02】ホテル白樺荘 (h=1500)	II	ii
	【S03】上高地西米屋山荘 (h=1500)	II	ii
	【S08】上高地帝國ホテル (h=1520)	II	ii
	【S10】五千尺ロッヂ (h=1500)	II	ii
	【S29】上高地アルペンホテル (h=1500)	II	ii
	【S29】上高地アルペンホテル (h=1500)	II	ii

分類Iと分類IIには、○に山小屋に開拓する近代登山の普及以前から山岳にたてられていた小屋を示す。

山道では岩魚留小屋のⅠ-i、明神では吉城屋のⅠ-ii、徳沢では徳沢園のⅠ-i、横尾では該当無し、横尾から槍ヶ岳山頂に至る登山道では槍沢ロッジのⅡ-ii、上高地では上高地温泉ホテルのⅠ-iiであった。これらをそれぞれの類型に即してまとめると、Ⅰ-iが2地域、Ⅰ-iiが2地域、Ⅱ-iが該当無し、Ⅱ-iiが1地域であり、Ⅰ-iとⅠ-iiが大多数を占めていた。また、それぞれの類型において、これらが占める割合をみると、Ⅰ-iが2/3、Ⅰ-iiが2/5、Ⅱ-iが該当無し、Ⅱ-iiが1/10であり、地域の先駆的な山小屋がⅠ-iとⅠ-iiの大多数の事例を占めていた。これらの値は、まず、地域の先駆的な山小屋が近代登山の普及以前から山岳にたてられていた小屋の土地と建物を多分に引き継ぐ過程を経て開設され、その後、これに追従して、多くの山小屋が新たな土地と建物にて開設されたことを示している。

以上の知見は、山小屋と近代登山の普及以前から山岳にたてられていた小屋を通史的な視点で結びつけるとともに、近代登山の普及以前から山岳にたてられていた小屋の土地と建物、および、それに関する経験的知識を礎として山小屋が開設されたことを示す。すなわち、山小屋の建設過程、それは、それまで山岳にて育まれてきた土地と建物に関する建築文化が近代登山の普及にともなって登山者へとひらかれていく、という建築のいとなみであったといえる。

④今後の展望

研究期間内には、山小屋の建設過程の他、山小屋の建設事業、山小屋の建設工程、山小屋の建築形態、山小屋の建築意匠論、についても研究に着手した。今後、これらを深め、日本山岳建築史の構築に向けたさらなる研究を展開していく予定である。

1857年に世界最初の山岳会が英国で発足して以来、世界の広い範囲に近代登山が普及した。これとともに、世界の山岳には、それぞれの文化的な背景にもとづいて、山小屋が開設された。日本の山岳でも、1900年代の初め頃から、続々と山小屋が開設された。この世界的な視点での歴史を前提とすると、山小屋は、日本の近代登山の歴史を語るだけでなく、日本の山岳と世界の山岳をつなぐ、共通の文化的な観点としても有効である。近代登山を契機とした山岳建築の調査研究は、日本のなかで、さらには、世界のなかで、さらなる展開を目指していく必要があると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

① 梅干野成央・土本俊和・小森裕介：近代登山の普及における山小屋の建設過程—ウォルター・ウェストンの槍ヶ岳山行経路付近

に開設された山小屋を事例として；日本建築学会計画系論文集，659号，211-220頁，2011年，査読有り

〔学会発表〕(計7件)

① 梅干野成央・堀田真理子・土本俊和：中房温泉の経営者による山小屋の建設計画とその背景；日本建築学会大会，早稲田大学，2011年8月23日

② 梅干野成央・土本俊和・田村啓：フカスの岩小屋に関する建物調査報告，日本建築学会北陸支部大会，福井工業大学，2011年7月10日

③ 堀田真理子・梅干野成央・土本俊和：槍ヶ岳殺生ヒュッテに関する建物調査報告，日本建築学会北陸支部大会，福井工業大学，2011年7月10日

④ 田村啓・梅干野成央・土本俊和：ヒュッテ西岳に関する建物調査報告，福井工業大学，2011年7月10日

⑤ 梅干野成央・田村啓・土本俊和：槍ヶ岳山荘の建設工程に関する復元的考察，日本建築学会大会，富山大学，2010年9月11日

⑥ 田村啓・梅干野成央・土本俊和：槍ヶ岳山荘の変遷及びその建築形態，日本建築学会北陸支部大会，新潟工科大学，2010年7月18日

⑦ 梅干野成央・土本俊和：中央アルプス西駒山荘の調査記録，東北学院大学，日本建築学会大会，2009年8月28日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梅干野 成央 (HOYANO SHIGEO)
信州大学・工学部・助教
研究者番号：70377646

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし